

鴨川における歩行者の経路パターンと景観イメージ

宮 岸 幸 正*

Route Patterns and Images of Landscapes on the Riverside of Kamogawa River

Yukimasa Miyagishi

This paper describes some characteristic aspects of walking route on the riverside. After making surveys of walker behavior on the riverside of "Kamo" river in Kyoto city, three types of pattern are identified as follows: a) "straight walking (going and returning)", b) "round walking (crossing bridges)", c) "zigzag walking (passing through)". In these choice patterns, round walking type increased between "Kitayama" and "Kitaohji". And there were high evaluations of landscapes in this area.

1. 研究の目的

河川水辺空間の整備は、快適な都市空間の創出において重要な役割を担っている。アメニティ豊かな水辺空間は、都市における貴重なオープンスペースであり、親水性を持ちながら、緑豊かな自然環境が保持される空間でもある。

本研究は、京都市内を流れる鴨川のなかで、高野川との合流点である出町柳以北の鴨川（賀茂川）を対象とし、その水辺空間の景観的特質を主として利用者の歩行経路からみた行動パターンと、鴨川の水辺空間に対し抱いている景観イメージという2つの側面から捉えようとするものである。

2. 調査の方法

鴨川の水辺空間のなかで、上賀茂橋から出雲路橋までの区間を対象とし、実空間において利用者に対し、アンケート調査を行った。調査にあたっては、対象区間を、1. 上賀茂橋～北山橋、2. 北山橋～北大路橋、3. 北大路橋～出雲路橋、の3区間に区分し、各区分ごとに調査者を割り当てた。なお、各区分とも調査日時は同一日時とした。また、各区分とも調査者は、川を挟んで東岸および西岸の両岸を調査対象空間とし、各区分内の一カ所で調査を行うのではなく、それぞれの区分内を移動しながら、原則としてランダムサンプリングにより、被験者を選定した。

3. 調査の結果

3-1. 調査年月日および被験者群の属性

調査日時は、1997年10月25日（土）13:00～17:00および10月26日（日）10:00～17:00で、いずれも天候は晴れ。アンケート調査により得られた被験者数は、男性73名（47.7%）、女性80名（52.3%）、計153名であった。年齢別では、10代が23名（15.0%）、20代が56名（36.6%）で最も多く、30代が18名（1

* 建設工学科 土木工学専攻

1. 8%)、40代が19名(12.4%)、50代が9名(5.9%)、60代が18名(11.8%)、70代以上が10名(6.5%)となった(図-1)。

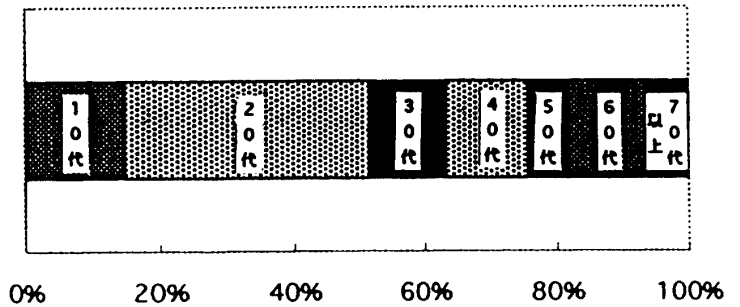


図-1 年齢構成

自宅から鴨川までの所要時間を見ると、30分以上が37%、次いで10分~20分および5分~10分

が共に18%であった(図-2)。自宅から鴨川までの利用交通手段は図-3のとおりで、徒歩が47%で最も多く、ついで自転車(18%)、自動車(14%)、地下鉄(12%)の順である。これらの結果をまとめると、今回の調査では、鴨川へ30分以上という比較的時間をかけて来訪する人が約1/3、自宅から徒歩で訪れる人が約半数となった。

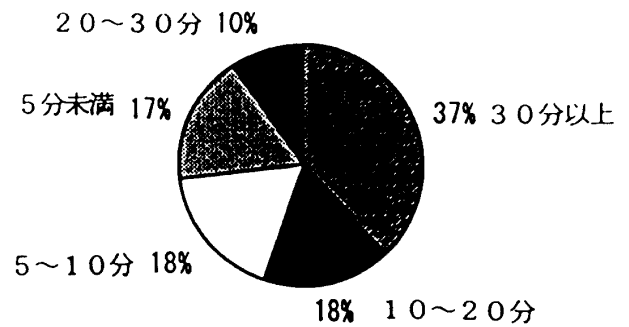


図-2 自宅から鴨川までの所要時間

次に、鴨川に対する利用頻度については、毎日の人々が17%で、この毎日利用する人を含む週に1回以上の利用者が、50%で半数を占めていた(図-4)。

3-2. 行動パターン

鴨川の水辺空間において、普段最もよく利用する経路を、地図上に記入してもらった¹⁾。その結果をまとめたのが表-1である。いうまでもなくこれらの経路はいずれも歩行による経路であり、河川敷への出入り口および経路、進行方向を記入してもらった。アンケート用紙回答者153名のうち白紙または不明確な回答を除く有効回答数は134(87.6%)であった。

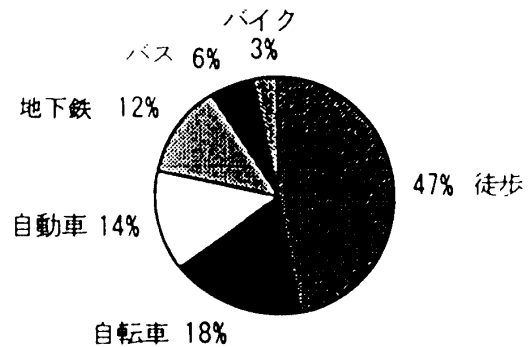


図-3 鴨川までの利用交通手段

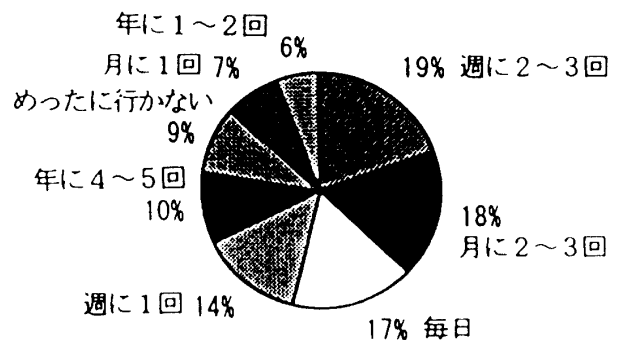


図-4 水辺空間の利用頻度

その結果、行動パターンについては、経路形態から3つの経路パターンに分類することができた。1つは、片側の河川敷のみを利用し、線状に往復し、河川敷へのアクセスポイントが同一である、「線状往復型」である。2つ目は、橋を渡り対岸を経由しもとに戻る「周遊型」。3つ目

表-1 区間別行動パターン別集計

行動パターン	区分	上賀茂～北山		北山～北大路		北大路～出雲路		全区間	
1.線状往復型	東岸型	15	11.2%	4	3.0%	10	7.5%	29	21.6%
	西岸型	6	4.5%	13	9.7%	9	6.7%	28	20.9%
	合計	21	15.7%	17	12.7%	19	14.2%	57	42.5%
2.周遊型	橋1型	4	3.0%	16	11.9%	4	3.0%	24	17.9%
	橋2型	4	3.0%	4	3.0%	1	0.7%	9	6.7%
	橋3型	7	5.2%	5	3.7%	9	6.7%	21	15.7%
	合計	15	11.2%	25	18.7%	14	10.4%	54	40.3%
3.通り抜け型	東型	4	3.0%	1	0.7%	3	2.2%	8	6.0%
	西型	5	3.7%	2	1.5%	8	6.0%	15	11.2%
	合計	9	6.7%	3	2.2%	11	8.2%	23	17.2%

は、出発地点へ戻らずに異なる地点で河川敷から抜け出る「通り抜け型」である²⁾(図-5)。なお、「通り抜け型」については、その大半が橋を渡り対岸へ行きそのまま抜け出る折れ曲がりタイプであった。

これら3つの行動パタ

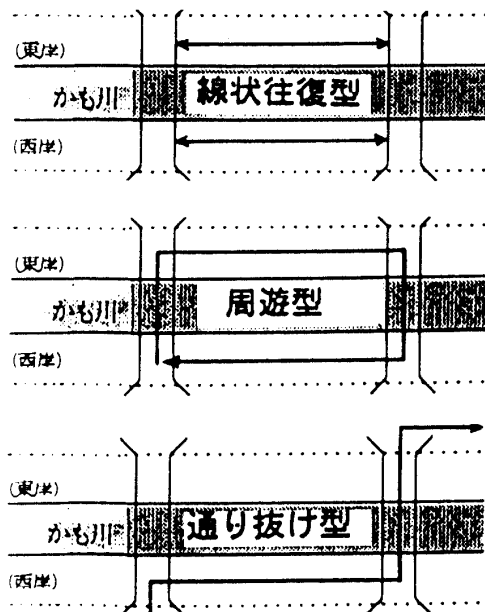


図-5 行動パターン

ーンの割合は、3つの区間を総合すると、「線状往復型」が42.5%で最も多く、次に「周遊型」が40.3%で、これら2つで82.8%となる。「通り抜け型」については、最も少なく、特に北山～北大路間ではほとんどなかった。

以上の結果から、半数には満たないものの約40%程度の人が、鴨川の水辺を利用するときに、兩岸のうち1方のみを利用するのではなく、橋を渡り、対岸を歩いて元に戻ってくることがわかった。また、この「周遊型」については、3区間のなかで北山～北大路間の間が最も多く、この区間においては、北山橋と北大路橋の2つの橋を渡って周遊し、もとに戻ってくる経路パターンが多いことがわかった。

3-3. 利用目的

鴨川における水辺空間の利用目的の集計の結果をまとめたのが図-6である。なお、この利用目的の項目は、複数の利用目的が考えられるため、複数回答可能とした。結果を見ると、「散歩」を目的とする人が最も多く、全体の70%近くを占めた。次に多かったのは「休息」であり、約30%近くの人があげていた。続いて、「自然観察」「軽い

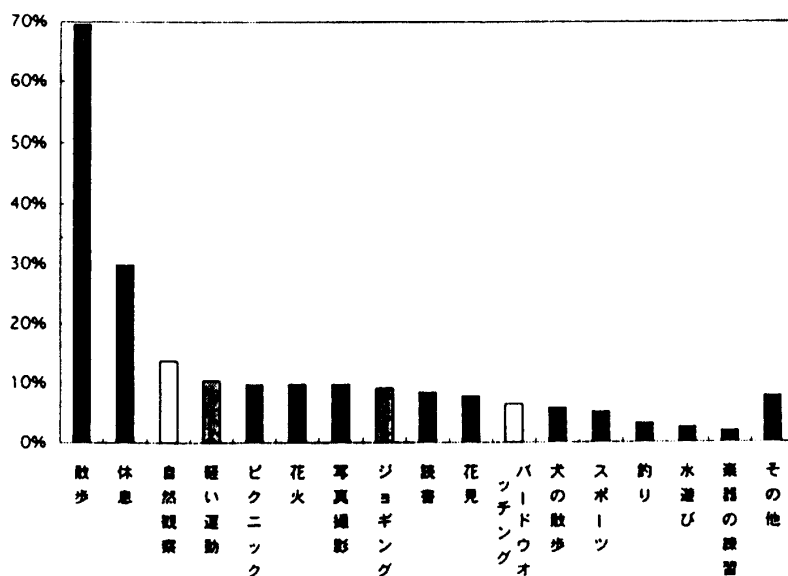


図-6 水辺空間の利用目的

表－２ 想起された景観要素

1	水鳥	97	63.4%
2	桜並木	64	41.8%
3	山並	29	19.0%
4	水	24	15.7%
5	犬の散歩	14	9.2%
6	カップル	12	7.8%
7	ベンチ	10	6.5%
8	橋	9	5.9%
9	魚	8	5.2%
10	遊歩道	4	2.6%

表－３ 鴨川の魅力性

1	特に景色がよい	58.8%
2	樹木や草花などの緑が豊富である	35.9%
3	ベンチなどの休息のための設備が整っている	30.7%
4	比叡山や大文字山などの山並みが見渡せる	29.4%
5	歩道が整備されている	24.2%
6	水辺に近寄れる	20.3%
7	家から近い	18.3%
8	川を横断できる	10.5%
9	公園として整備されている	9.2%
10	運動施設（テニス・ゲートボールなど）がある	4.6%

運動」「ピクニック」などであった。いずれも上位にあげられた利用目的は、散策型のウォーキングを主体とするもので、鴨川の水辺空間が人々の散策や、憩いの一時として利用されていることを示している。また、「自然観察」が第3位となったことは、水辺空間が都市のなかで自然との対話を取り持つ貴重な空間であることを示している。

3－4. 想起される景観要素

鴨川で一番印象に残る風景やものを最大3つまで想起してもらった。その結果、鴨川で印象に残る景観構成要素については、「水鳥」が最も多く、一人当たりの想起率では63.4%と高い数値を示した（表－2）。この「水鳥」については具体的に「鴨」や「ユリカモメ」と記した人が最も多く、他に「鳩」や「白鷺」などもあげられていた。

次に、多かったのは「桜並木」であり、そのなかでは北山～北大路間の東岸にある「半木の道」が具体的にあがっていた。3番目は「山並み」であり、「比叡山」、「大文字山」、「北山」などが具体的に想起されていた³⁾。これらの上位に想起された要素についてみると、「鴨」や「ユリカモメ」に代表される「水鳥」の存在が鴨川河川と密接に関わっており、人々の心象イメージのなかで「水鳥」の存在が鴨川と一体化していることがわかる。また、「桜並木」は、枝垂れ桜の並木道である「半木の道」の存在性が高く、魅力ある遊歩道に対する人々の関心の高さを示している。さらに、「山並み」は、河川空間のような遠望のきくオープンスペースにおいて、「見晴らす」「見通す」などのパノラマ的視野での遠望景観が少なからず人々の心に残っていることを示している。

3－5. 鴨川の魅力性

鴨川に対する魅力的な理由をまとめたものが表－3である。第1位は「特に景色がよい」で58.8%で過半数の人があげていた。次に、「樹木や草花などの緑が豊富である」（35.9%）で、第3位が「ベンチなどの休息の設備が整っている」（30.7%）となった。これらをまとめて考えると、その水辺空間が魅力的である条件として、当然のこととしてまず総合的な景観が優れていることであり、その景観構成は、樹木や草花などの緑が豊富であり、また遠くの山並み

が見渡せる遠望的にも魅力ある景観であることが指摘できる。つぎに、利用者の河川敷での歩行や休息を快適にする施設や設備として、樹木、遊歩道の整備、ベンチなどの適切な配置も魅力を高める上において重要である。また、親水性を高めるため水際へのアプローチに対する工夫が必要であり、飛び石づくたいに川を横断できることにより、さらに親水性を高め魅力的にすることも必要であるといえる。

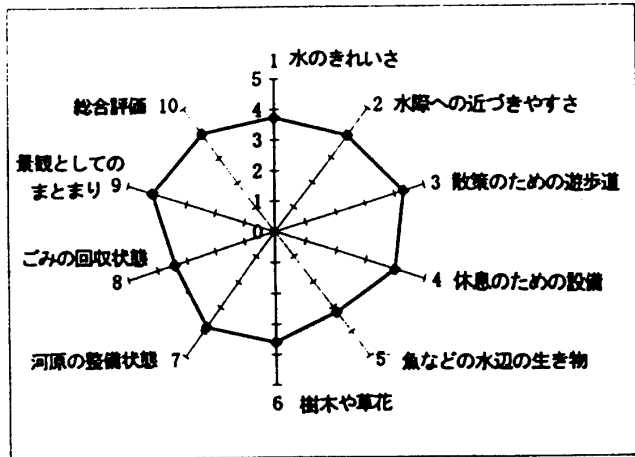


図-7 水辺環境評価

3-6. 利用者からみた水辺環境評価

水辺環境評価を項目別にみると、5段階評価⁴⁾のなかで、各項目の点数はかなり高く、総合評価で4.0となった(図-7)。項目別にみると「散策のための遊歩道」が4.3で最も高く、次いで「景観としてのまとまり」が4.2、「休息のための設備」が4.0、「水際への近づきやすさ」が3.9であり、いずれも高い評価を得ていた。

一方、特に評価点の低かった項目はなかつ

たものの、「魚などの水辺の生き物」や「ゴミの回収状態」などは、それほど高くはなかった。

これらの結果をまとめると、休息のための適切なベンチなどの配置が遊歩道の魅力を高め、水際へのアクセスポイントの多さが、親水性を高めることに繋がっているとおもわれる。また、ゴミや空き缶などの回収や雑草の除去などの河原の日頃のメンテナンスによる、清掃も忘れてならない。

4. まとめ

鴨川における今回の調査結果をまとめると次のようになる。

(1) 水辺空間の利用者の経路選択による行動パターンとしては、3つのタイプに分類された。それらは、線状型、周遊型、通り抜け型の3タイプであった。

(2) 鴨川の北山～北大路の区間においては、周遊型が最も多かった。このことは、この区間が東岸と西岸においてお互いに異なる空間特性や景観をもち、東岸には、比較的閉鎖的空間となる桜並木による「半木の道」があり、一方西岸では、対岸景として植物園をバックにさらにその背景に東山の山並みがスカイラインとして位置する遠望景観を持つなど、両岸の景観特性が似通っていないことによって、両岸を巡る行動が多かったものと思われる。また、今回のアンケート調査において、御園橋～出雲路橋の区間に限定し、そのなかで最も魅力的な区間を選んでもらったが、そのなかで北山～北大路間が最も魅力的な区間となっていた。また、北山～北大路間が魅力的な理由としては、景観的魅力と散策のための休息の設備があげられていた。

(3) 利用目的については、歩行を伴う散策型の利用目的が多く、鴨川の水辺空間が憩いの一時として日常的に利用されていることがわかる。なお、散策型の利用目的については、「犬の散歩」や「早朝の散歩」、「ウォーキングエクササイズ」など、その歩行の目的はさらに細分化され、

しかもそれらが時間帯によってその割合が大きく変化している。したがって、利用目的について広義の散策を中心に調査するなら、調査時間帯がきわめて重要であり、今後、時間帯ごとの細分化された散策内容とその割合を調査することが課題として残っている。

(4) 想起される景観要素としては、鴨川の象徴ともいえるべき「鴨」や「ユリカモメ」などの「水鳥」の想起率が高かった。また、一方で北山～北大路間の「半木の道」に対する想起率も高く、この遊歩道が人々の心に大きく印象づけられていることがわかる。

(5) 鴨川における魅力性については、特に景観がよい点があげられており、緑の豊かさ、ベンチなどの休息のためのファニチュア類が整っていること、山並み遠望景観、歩道の整備状況などがあげられていた。

(6) 水辺環境評価としては、比較的どの項目も水準以上で評価点が高かった。なかでも、散策のための空間評価が高く、遊歩道、休息のためのファニチュア類に区間ごとに適度な変化性をもたせていることが単調さを補い評価されていた。また、河川を横断する飛び石の配置、水際への階段整備などによる親水性の高さも評価されていた。

以上が、調査結果であるが、今後の課題として、鴨川の他の区間においても行動パターンと景観評価を中心とした同様の調査が必要であり、鴨川における各区間ごとの景観的特徴を把握することにより区間ごとの他とは異なる特性ならびに変化性についても調べる必要があると思われる。

補注

1) 鴨川における利用者の経路集計については、被験者を調査者が後方から追跡調査を行う方法が考えられるが、ここでは、アンケート方式により地図上に典型的ルートを描いてもらった。その理由は、鴨川の水辺空間利用が日常化し習慣化された行動形態をとる利用者が多いことから、その典型的ルートを地図上で描くことが比較的容易であると考えたからである。したがって、その行動パターンが定型化してなかったり、来訪が初めての被験者に対しては、必ずしも適切な回答が得られず、全被験者153名のうち19名はそれらに該当した。また、習慣化していながらも複数のルートを有する被験者については、最も頻度の高い行動パターンを描いてもらった。なお、今回の地図上で描いてもらった区間の範囲は、御園橋～出雲路橋までの区間とした。

2) 「通り抜け型」については、鴨川河川敷において出発地点と到達地点が異なるものであり、調査の結果その大半は、橋を渡り対岸へと向かう、折れ曲がり型であった。

3) 想起された景観要素として、表-2以外に、「楽器の練習」「マラソン」「河原での休息」「釣り」「散歩している人」など、河原での人々の行動の様子をイメージしたものもあった。また、「空気のよさ」「清潔」「青春そのもの」「のどか」「こころのやすらぎ」「想いで」などのように、水辺の雰囲気や気分を表現したものも見られた。鴨川の水辺に対する想起内容は、きわめてバラエティに富んでいるといえる。これらの想起内容をみると、水辺空間がいかに人々の生活と密着し、また安らぎを与える精神的シンボルとなっているかがうかがえる。

4) 5段階評価については、5. 満足している 4. まあ満足している 3. どちらともいえない 2. やや不満である 1. 不満である、の5段階のなかから選択してもらった。

(平成9年12月12日受理)